

ESDの実践例 環境と教育の現場から

ESD（持続可能な開発のための教育 ※左図参照）の取り組みが、全国各地で行われています。環境破壊や貧困問題のない未来をつくるために、私たち一人一人がそれぞれの地域や社会の中で「学び、つながり、始める」ことが ESD です。ここでは、未来のための教育に取り組む 5 つの団体の活動を紹介します。



Case 1

ESD キッズクラブ（地球環境基金助成団体）

幼児期から育もう 環境教育の「種」



「水の出しっ放しはダメばい!」「これを捨てるのはもったいなか〜」——熊本市の市民団体「ESD キッズクラブ（※1）」は、県内の幼稚園・保育園で園児を対象に「環境しつけ講座」を開催しています。この講座は、同団体が提案する「ESD キッズプログラム」の一つで、環境教育の原点として“ものを大切にする”“もったいない”の精神を子どもたちに

幼児期から、紙芝居やゲームを通して楽しみながら伝えていく活動です（※2）。

「小中学生、そして大人になっても環境への気配りが当たり前にできるようになること。その基礎を幼児期に身につけておくことが大切です」（代表・梅田幸代さん）

昨今の環境への意識の高まりから、幼児期における環境教育への関心も高まってきています。しか

る企画、保護者への情報発信などの実践方法を紹介しています。また、同団体は保護者向け環境教室も実施。「環境しつけ」が幼稚園・保育園だけでなく、各家庭でも行われることで、環境教育の「種」が確実に根付くように取り組んでいます。

し、現場の先生たちが、その最初の一步を踏み出せない現状もあります。そこで、同団体はプログラムの一環として「エコな先生講座」を開催。率先して取り組む先生向けに、環境を取り入れた授業や保育

※1 ESD キッズクラブは、幼稚園・保育園を対象に、幼児向け「環境しつけ」講座の開催、園の環境取り組み支援、保護者向け環境教室の開催などを柱に、幼児期の環境教育を支援する「ESD キッズプログラム」の普及に取り組んでいる。2007 年設立。

☎ <http://esd-kidsclub.ecgo.jp/>

※2 手洗い学習を通して水の大切さを知る「もったいない! 水編」や分別ゲームでリサイクルを知る「どうなる? リサイクル編」など、環境問題についての 5 編からなる。

環境しつけ講座の様子。ソーラーカーであそんでみよう



ESD (Education for Sustainable Development) って？

Why なぜ

これまでの開発は、物質的な豊かさをもたらす半面、地球温暖化などの環境問題や貧富の拡大、人権侵害などを生み出してきました。こうした課題を解決し、皆が安心して暮らせる世界にするために、自然環境や社会、経済とのバランスを重視した新しい開発の在り方が求められています。この未来に向けた取り組みの大切な基盤となるのが「持続可能な開発のための教育」です。

What 何を

ESD の取り組みは、環境分野を中心に地域づくりや国際協力、人権問題など多岐にわたります。目の前の課題に向かい合うことから ESD の第一歩が始まります。

When いつ

1992 年の地球サミット（ブラジル）で「持続可能な開発」が中心的な考え方として位置づけられ、2002 年のヨハネスブルクサミットで日本が「ESD の 10 年」を提案し、同年の第 57 回国連総会で採択されました。

Who だれが

ESD の対象は、子どもたちだけではありません。幅広い世代の様々な立場の人々が ESD の担い手であり、学び手になることが期待されています。

Where どこで

NGO・NPO、学校、企業、自治体、公益法人、研究機関など、多くの組織や団体が全国各地で ESD に取り組んでいます。

Case 2

NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター

自然や人とのつながりを 山村の暮らしの中で学ぶ

小学3年生から中学2年生までの都会に住む子どもたちが、親元を離れ、南信州の山村で1年間共同生活を体験する——。NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター（※1）では、1980年代から、山村留学・暮らしの学校「だいだらぼっち」（※2）を実施して

地元の猟師さんも山村の暮らしを教えてください先生です



います。ここで子どもたちは、地元の学校に通いながら宿泊施設で集団生活をし、食事づくりや洗濯、掃除、風呂たきなど、暮らしにかかわるすべてを自分たちで行います。その他にも、まき割りをしたり、食器やカップを陶芸で作ったり、野菜や米作りなど、山村留学の醍醐味を生活の中で体験します。

「子どもたちは失敗もありますが、みんなで学び、教え合うことで、今までできなかったことができるようになる。こういう経験を通じて、思いやりや支え合い、チャレンジすることの大切さを、本当の意味で分かってくるんです」（事務局長・佐藤陽平さん）

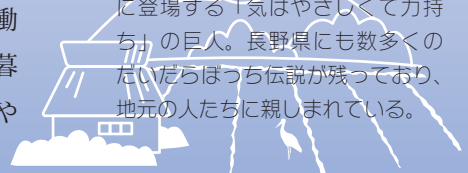
小さな山村の中で、食べる、働く、遊ぶ、創る、伝えるなどの「暮らし」を「学びの原点」とし、人や



地域・自然とのかかわりを感じながら、「心の豊かさ」や「生きる力」を育む「だいだらぼっち」。これまで、約350人の子どもたちがこの山村留学を体験。子どもたち、保護者たちからは、「成長させてくれた場」として感謝の声が多く寄せられています。

※1 グリーンウッド自然体験教育センターは、日本の豊かな自然環境を活用した自然体験教育活動を推進する NPO 法人。次代の担い手である青少年が「心の豊かさ」や「生きる力」を育てていくことを支援するために、森・川をフィールドにした多彩な自然体験教育プログラムを実施。2001 年設立。
☎ <http://www.greenwood.or.jp/>

※2 だいだらぼっちは、日本各地の民話に登場する「気はやさしくて力持ち」の巨人。長野県にも数多くのだいだらぼっち伝説が残っており、地元の人たちに親しまれている。



くための教育も行っています。

「自分たちの海を自分たちの力で守ること。そこから命の尊さや生きるための力を学んでほしいです」(理事長・関口雄三さん)

同会は昨年、「東京湾海水浴場復活プロジェクト」を立ち上げました。2010年夏には、葛西の海で子どもたちの水遊びイベントを通して、東京湾内の海水浴場の復活に更なる啓発を行います。

※1 ふるさと東京を考える実行委員会は、子どもたちが海辺に親しむための環境教育活動や、NPO、市民活動を支援。2001年任意団体として発足。2010年に認定NPO法人化。

☎ <http://www.furusato-tokyo.org/>

※2 1個のカキは1日に400リットルもの海水をろ過するといわれている。マリナーアニングでは、カキ以外の二枚貝や、ノリ、ワカメなどの海藻も利用して水質浄化を行っている。

名前や絵を書き込んだフロート(浮き)に稚ガキを取り付ける子どもたち



Case4

財団法人 損保ジャパン環境財団

学生を環境NPOへ インターンシップ派遣

損保ジャパン環境財団(※1)の「CSO(※2)ラーニング制度」は、大学生や大学院生を8か月間インターン生としてCSOに派遣して、自然保護の現場体験や環境講座の運営などをしてもらうもの(※3)。インターンを通して、参加者が環境問題や市民社会のあり

里山合宿で、菜の花植え付けを体験する学生たち



方などを考え、より視野の広い社会人として巣立っていくことを目的としています。「スタート当初のころに比べ、環境問題への関心が高まったせいか、自分の学習のためだけでなく、行動することで人や社会に影響を与えたいと応募してくる学生さんが増えてきました」(同財団課長・芦沢壮一さん)

インターン生は、約40のCSOに派遣され、干潟や里山の保全や田畑での観察や収穫、教育プログラムの制作や会報作りなどに取り組みます。終了後の報告書には、「ウミガメの保護活動を通して、人と動物とのかかわりを意識できるようになった」「今後はCSOと市民との距離がもっと身近になる方法を探っていきたい」など、彼らが貴重な体験から気付き、学びとった声がたくさん寄せられています。



「木を植える『人』を育てたい」との願いが込められたこの制度。2001年の開始から現在までにインターンシップを経験した学生は、約600人に上ります。

※1 損保ジャパン環境財団は、環境分野の人材育成、情報収集や提供、活動・研究への支援などを通して環境保全に資することを目的とした財団法人。1999年設立。

☎ <http://www.sjef.org/>

※2 CSO(Civil Society Organization)。NPO・NGOを含む市民社会組織。損保ジャパン環境財団のCSOラーニング制度の対象となる団体としては、「持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)」や「気候ネットワーク」などがあげられる。

※3 インターン生には、1時間当たり800円の奨学金と交通費を支給。その一部は、損保ジャパン社員の寄付金である「ちきゅうくらぶ社会貢献ファンド」を活用している。

Case 3

認定NPO法人 ふるさと東京を考える実行委員会（地球環境基金助成団体）

東京湾を子どもたちが泳げる海に

現在は、数えるばかりとなってしまった東京湾の海水浴場。戦後間もないころは東京湾の各地にたくさんの海水浴場がありました。減少してしまった理由の一つとして水質の問題があると言われてい

ます。
「ふるさと東京を考える実行委員会」(※1)は、10万人署名活動や水質浄化実験、子どもたちが海を身近に感じるためのイベント(ノリ育成や潮干狩り、ハマグリ放流、海辺の生き物観察会)などを通して、子どもたちが泳げる海を

復活させる活動を展開。なかでも、カキ等の水質浄化生物を活用した「マリンガーデニング」は、アメリカで行われている「オイスターガーデニング」を日本に導入する試みです(※2)。同会はこのマリ

Case 5

えひめグローバルネットワーク

銃を自転車に—モザンビーク支援プロジェクト

えひめグローバルネットワーク(EGN ※1)では、自転車、足踏みミシンなどの支援物資をアフリカ・モザンビーク共和国に送る活動を10年間続けています(※2)。

物資は、同国の内戦後、人々の間

に残された銃などと交換され、平和構築のために役立てられてきました。

輸送される自転車は、松山市が放置自転車として回収したもの。高校生ボランティアなどにより修理され、小学生を中心に集めた文房具などとともに輸送されます。日本で使われなくなったものをリユースするこの活動は、大量消費や廃棄の問題を考える環境教育の場にもなっています。この他にもEGNでは、スタッフが「平和の語り部」(※3)として市内の小・中学校で講演。子どもたちにモザンビークの歴史・現状を知ってもらい、「自分たちでできることをしたい」という思いを、輸送費のための募金活動等へ発展させています。

「両国の人々がともに学びあ



こと、助け合うこと。私たちの活動は、物資を送る支援にとどまらず、より多くの市民の協力や国際理解を促す教育も含まれています」(EGNモザンビーク事務所長・横田美保さん)



※1 えひめグローバルネットワークは、「地球規模で考え、地域で行動し、自ら変わっていくこと」をモットーに、海外支援事業やフェアトレードの促進、環境保全活動、異文化理解講座、各種講演・イベントの開催などを行う愛媛県松山市のNPO法人。1998年設立。
☎ <http://www.egn.or.jp/>

※2 これまでに約600台の自転車をモザンビークに輸送。

※3 松山市が戦争の悲惨さや平和の大切さを伝える人を登録し、小・中学校に講師として派遣する事業。